



# 沼中だより

新春号

令和8年1月8日発行

逗子市立沼間中学校

校長 熊谷 啓明

学校教育目標：「個」・「心」・「力」

## ＜明けましておめでとうございます＞

皆さん、お正月はいかがでしたか？ご家族とゆっくり過ごせた人、初詣やおせち料理を楽しんだ人、あるいは受験勉強で忙しかったという人もいるでしょう。実は私は、四日から体調を崩し、2日間ほど寝込んでしまいました。その間は何も食べられず、結果として、年末年始に増えた体重が見事に元通りになりました。あまり褒められた戻り方ではありませんが、新年早々「健康のありがたさ」を身にしみて感じる出来事となりました。どうか皆さん、体調管理には十分お気を付けください。

さて、お正月は私たち日本人にとって一年の始まりを祝う大切な行事ですが、その背景には、古くから受け継がれてきた日本の精神文化が息づいています。先日拝聴した、麗澤大学大学院・特別教授の中山理先生の講義から、お正月に込められた意味について学ぶ機会がありました。その中から二つの視点を紹介したいと思います。

まず、「お年玉」の本来の意味についてです。「玉」とは単なる贈り物ではなく、「魂」すなわち靈魂を表す言葉であり、祖先の靈とも結びついた概念だと考えられてきました。日本の正月は、新しい年の生命力をもつ歳神様を家にお迎えし、家族の無事や豊作を祈る行事として発達してきました。お年玉とはもともと、この歳神様の御靈、神の靈力そのものをいただくという意味をもっており、供え物のお下がりを分かち合う中で、その「力」を受け取るという心の営みだったのです。お金を渡す行為だけではなく、「新しい一年を共に生きる力を授け合う」という願いが込められているところに、精神文化としてのお年玉の原型を見ることができます。

次に、正月と祖先崇拜との関わりについてです。正月に迎える歳神様は、もともと祖先の靈が姿を変えた存在として捉えられてきました。祖先の靈は、やがて田の神や山の神となって子孫や地域を見守ると考えられ、正月はお盆と同じく、祖先が現世に戻ってくる大切な時期と理解されてきました。門松やしめ縄が家の入口に飾られるのは、そこに神や祖先の靈が宿る「依り代（よりしろ）」を用意し、日常とは異なる清らかな空間をつくるためです。こうした空間の中で、私たちは新しい生命力と幸福を授かる——それが本来のお正月の姿でした（ちなみに、10月31日のハロウィンも、もともとは古代ケルト民族の死者を祭る行事であり、祖先を迎える行事であり、お盆や正月と似た考え方を持っています）。

家族のつながりが希薄になりつつあるといわれる現代だからこそ、お正月は、祖先から続く「いのちの流れ」と、いま共に生きる家族のつながりを見つめ直す大切な機会です。私たちは祖先から命と暮らしを受け継ぎ、一人で生きているのではありません。目には見えなくとも、多くの支えや恩恵の上に今の生活があります。「ありがとう」という感謝の気持ちは、日常を豊かにし、子どもたちが健やかに育つ土台となります。こうしたことを、中山先生の講義を通して知ることができました。

新しい年をきっかけに、日本の歴史・文化・伝統に触れながら、ぜひご家庭で語り合う時間を大切にしていただければと思います。今年もどうぞよろしくお願ひいたします。